

大庭米治郎教授を偲ぶ



略 歴

明治二十三年 七月十七日、京都市左京区田中上柳町に生る

明治四十二年 三月、大阪府立堺中等学校を卒業

大正 元年 七月、第三高等学校を卒業

大正 五年 七月、京都帝国大学独法科を卒業

大正 七年 十二月、同大学文科独文学科を退学

大正 五年 九月より翌年六月まで京都地方裁判所司法官試補

大正 十一年 四月より大正十三年まで、東洋大学教授嘱託、日本大学教授嘱託

大正 十三年 四月より昭和二十五年まで、大谷大学予科教授、

その間大正十四年九月より七ヶ月、第三高等学校

講師、昭和四年四月より昭和十七年三月まで、京

都府立医科大学講師

昭和二十五年 四月より昭和四十二年二月まで、大谷大学教授、

その間昭和二十九年七月、授文学博士、昭和三十年

大谷大学長より永年勤続表彰、昭和三十七年四月

より昭和四十年三月まで大谷大学図書館長を兼任

昭和四十二年 二月七日、逝去。三月七日「正五位勲三等瑞宝

章」を叙勲される

学徒育成の洪恩を思う

山 田 亮 賢

「大庭先生の逝去は、何か大谷大学が空洞になったように感ぜられ、心淋しいことである」と、去る二月母校を思う同窓の友から実感の籠った悲嘆の便りをいただいた。心ある同窓の諸氏は同様にそうした感を懐いたことであろう。在職四十三年と言えば、半世紀に近い長年月、一貫してドイツ語を通じて、学徒育成に携みない熱情を傾倒せられたことであるから、先生の全生涯が大谷大学の薫育に費されてしまったと言っても過言ではない。勿論先生はその間にドイツ文学の研究を深められ、独自の風格ある学問研究を進められた。一昨年新たに改装成った先生の書斎を訪れた時、先生はさも満足げに、これからこの書斎で大いに勉強するつもり強く言われた。老いて益々研究意欲の旺盛な態度に衝たれるものがあった。しかしあの書斎で新たな気分で行研究を続行せられたのも僅か二年足らずであったことを思えば、人生の果敢さ、空しさを痛感せしめられるのである。

願れば、昭和十三年四月、私は大谷大学予科に入学した。故佐々木月樵学長が、学長事務取扱から、正式に学長職に就かれた時である。その時、予科の新入生は百二十名で、英語を第一外国語とするクラスが二クラス、独語を第一外国語とするクラスが一クラス編成された。私はドイツ語志望であったから、志望通り独語

クラスに入ることを許された。その最初の担任教授が大庭先生であった。ドイツ語に関しては何も知らない私達は、入学早々教室で大庭先生からドイツ語読本を学んだのである。後日知ったことであるが、大庭先生もその新学年から、大谷大学に新たに就任されたのである。それ以前は東京の東洋大学に在職していたとのことである。大谷大学へ迎えられた事情については、私などの知ることはないが、その前年即ち大正十二年九月には東京の大震災があり、先生も被災者の一人であった。そうした外的な事情もあつたであろうが、単科大学として発足した大谷大学が教授陣の充実を計って、そこに大庭先生を迎える機を得たことと思われる。

教室ではじめて御目にかかった先生は、今から言えば、なお三十歳代の若さであつた。しかし私達が何も知らないドイツ語を、アー・ペー・チェーから教えて下さった先生が大成された大学教授のような印象をうけた。堂々たる容姿、その風手からしても私達を圧するものがあつた。その大きな存在に見えた先生が物静かで極めて寛容な態度で、徐々にドイツ語の手ほどきをして下さつた。特に厳格というような印象はうけなかった。大学時代ではずっと後輩であつたという若い番匠谷英一先生(昨年物故された)が既に大谷大学にドイツ語の先任教授として就任して居られ、予科の学生を厳しく鍛えて居られた。私のクラスは、ドイツ語が一週八時間課せられ、英語は四時間であつた。新任の大庭先生と、この先任の番匠谷先生とが、一週四時間づつ受持たれ、番匠谷先生はドイツ語文法を手固く教えて下さった。上級生が番匠谷先生がドイツ語の授業を厳しくやるということを、新入生に過大に喧

伝していたため、そのことが先入主となっており、おそれをなし、文法の時間は一種の恐怖感が漂っていた。それに比して、大庭先生は東京の学生の気風と、大谷大学の新入生の傾向とを対比しつつ、ドイツ語を第一外国語とするクラスに特別な関心を持って居られたようである。最初極めて寛容な態度で導いて下さったのも、徐々に様子を見てからという気持ちでなかったかと思われる。従って当時の印象では、私達のクラスの学生は、先生から特に厳しさを感ぜなかったと思う。ドイツ語を一年間にどの程度まで習得させるか、無色白紙の学生に特に興味を持たれたようであった。当時は三学期制度であったが、二学期の終りにはいつしか初歩の読本を終り、第三学期の一月には「黒船」(Schwarze Galeere)という短篇小説を読むことになった。それまでに進んだことに喜びを感じたことを忘れ得ない。一方、番匠谷先生は、佐久間政一編の「ドイツ文法」を一冊、学年末までに必らず終えるという意気込で、厳しく鍛えられ、最後の時間には、全部終えて定価の欄 金貳円也というところまで読み、これで予定通り全部済んだという状態であった。

このように風格の異った大庭先生と番匠谷先生とが、予科三年修了までドイツ語を持ち上り受持された。二年の時には外村完二先生(現客員教授)、三年になっては、故木村素衛先生が加わって、三人づつでドイツ語を担当された。三年の時にはドイツ語会話の授業が増加し、ドイツ人、ヘルフリッチ先生から教えていただいた。まことにドイツ語教授の陣容が整っていたのである。予科二年になった時、大庭先生は教科書としてノヴァリス(Novalis)の「ハインリヒ・フォン・オフターディング」

(Heinrich von Ofterdingen)を用いられた。二年生の実力では、随分難解であり、面喰ったことを今も記憶している。しかし大庭先生は自己の育成した学生を次第に引き上げ、それを楽しみにして、可成り程度の高いものを目指して居られたことが察せられる。そうした進み方であったから、予科三年では木村素衛先生が、キュルペ(Oswald Külpe)の「イマニエル・カント」(Immanuel Kant)を用いられ、高度の論文を読むことが出来るようになった。

予科二年の二学期の終りに、番匠谷先生が「朝日新聞」の懸賞小説に応募当選され、その後、「黎明」という小説が夕刊に連載された。そうしたことが機縁ともなったと思われるが、予科三年終了まで大庭先生と共に続いてドイツ語を受持つて下さったが、私達が学部へ進学した時、東京の立教大学へ転出せられた。そのため、学部へ進んだからは、大庭先生の負担が重くなったようである。その頃の大谷大学の方針は、学部でも最初二年間は、外国語を必修科目として課していた。毎週四時間は第一外国語を継続することになっていたのである。その頃の大谷大学の特色がこうしたところにも現われていたと言える。そのドイツ語は全部大庭先生が担当せられ、記憶をたどって見ると、学部一回生の時は、ウエルフリーン(Heinrich Wölfing)の「論文集」(Kleine Schriften)(小牧健夫・吹田順助共編)と「フアン・フリードリッヒ・ヘッベル」の「アグネス・ベルナウエル」(Agnes Bernauer)を読んだ下だった。二回生では「クルダーリッヒ」(Friedrich Hölderlin)の「ハイパーリオン」(Hyperion)と「ドイツ文学論集」(Neue Abhandlungen Zur Deutschen Geistesgeschichte)

(奥津彦重編)を用いられた。こうした教科書が選ばれたことは、一面その頃大庭先生の関心の深かったものであったことが想像される。

大谷大学独自の方針であったようであるが、何としても五カ年間連続して外国語が必修科目として課せられ、その間大庭先生に連続して担当していただいたことは、幸いであり奇しき因縁でもある。私としてはそこに個人の意志を超えた宿縁が深く感ぜられる。いつも温容に接していた印象からして、後年、大庭先生の語学の鍛え方の厳しさを後輩から伝え聞いて奇異の感がしたのである。時がそうさせたのであろう。私の級友にはドイツ語に堪能な人が出来、それらの級友は哲学を志望した。哲学には故鈴木弘先生が情熱を傾けて指導して居られた。大庭先生とは同年配であり、親しく交って居られた。優秀な学徒を鈴木先生の下へ送り込まれるような実情にあったと思う。私は長い年月、主として大庭先生にドイツ語を学んだのであるが、あまり上達しなかった。語学の才能もなく、努力も足らなかった。ただ大庭先生の御指導のお蔭でドイツ語に親しみ、その教養を自分なりに身につけていただいた。学部においては仏教学を専攻した私は、外国語の時間以外は殆んど大庭先生に接する機会が無くなった。その当時「文学概論」を講ぜられたと記憶するが、その講義を聴くことが出来なかった。従って私としては先生がドイツ文学の研究を深められたことについては何も知る機会はなかった。先生が訳された「賢者ナートン」や「シラーの美学論集」などは学生時代に特別な親近感を以て読んだ記憶はあるが、先生のドイツ文学研究に関しては何も知識の持ち合せがない。

私達が教室では大庭先生に会う機会が無くなった頃から、不運にも学内で色々な問題が起って来た。宗門大学という特殊の事情からであった。昭和五年三月学部を卒業する時を同じうして、大騒動が起って、やがて教授の総辞職、学生の総退学というような未曾有の事態にまで発展したのである。この事件が一応落着いても、相当長い期間暗黒時代というべき時が続いた。その当時、先生はどのような心境であられたか私は知る由もない。混乱の時代に或いは他の大学へ転出せられるような機会が一再ならずあったのではなからうか。或いは大谷大学に絶望的な心境に陥られたこともあったでなからうか。それは私の単なる憶測に過ぎない。だがよく堪えて下さって、谷大に止まり、学徒を愛し、一貫して育成に努力して下さったことは、大学全体の上から喜ばねばならぬことである。

先生は常に学生に関心を向けられ、学生の個性を尊重して、良き学徒を育成せられた。

大庭先生は自然に大谷大学に重き存在となられ、先生を敬慕する同窓生が時折母校の話ともなれば「大庭先生は御健康か」と問うのである。何か先生が大谷大学に在られることによって安心すると言うものがあつた。そうしたことから、先生が生涯をかけての学徒育成の洪恩が思われ、深い感謝の念を禁じ得ないものがある。先生は京都に來られて、最初糺ノ森の東、下鴨泉川町に住まれたが、後に同じ下鴨の松ノ木町に居を移された。そして御逝去の日まで長く下賀茂神社の北隣に定住された。偶然にも私は先生宅の近くに住み、学校への往復の途次、先生宅の前を通るのであるが、今は主なき宅の前に立って追慕の思い切なるものがある。

晩年の大庭先生

芳 原 政 弘

いくら惜しんでも余りあることであるが、敬愛する大庭米治郎先生は、去る二月七日午後六時四十三分、京都府立大学附属病院において胃潰瘍の手術のため、入院加療中であられたが、手術後の経過がおもわしくなく、医師団の献身的な努力と御家族の方々の手厚い御看護のもとに、突然お逝くなりになられた。享年七十七才であられた。

私自身にとって先生を失ったことは、大きな精神的支柱を失ったも同然であり、淋しくて淋しくてたまらない。月日が経つごとに、この淋しさも幾分減って行くだろうと思っていたら、反対に次第に増して行くばかりである。私はこれまでの人生をふりかえると、やはり大庭先生から受けた影響が一番大きかったような気がする。否、先生がいなかったとしたら、今頃自分はどうなっているかわからないとさえ思うのだ。それを考えると全く戦慄を覚えるのである。それにしても私は先生に御迷惑のかけっぱなしであった。鈍根の私を忍耐づよくじっと見つめて、これまでに育てて下さったことを、ただ頭を垂れて虚心に感謝したい気持ちである。

まだまだ先生から学びたい、先生と心ゆくまで語りたい、またこの際できるなら先生のお役に立って、御恩がえしがしたいとひ

たすらに念じて、他の迷惑も顧みず、無理に頼んで、名古屋から帰ってきた矢先に、こんなにも早く先生に逝かれてしまい、かえすがえすも残念で仕方がないのだ。

私が大学に入學したのが、昭和三十年であるから、当時すでに先生は六十五才になっておられ、学問も人格も完成期に達して、すべての面で円熟し、堂々たる風格を具えていられた。専門のドイツ文学のみならず、それ以上に造詣の深い日本の造形芸術（特に絵画、彫刻、書道）及び日本の芸能（特に能、歌舞伎）をはじめとして、西洋哲学、日本文学、外国文学、音楽など広い文化と教養を全く自家棄籠中のものとしており、完璧といってもよい透徹した理解の仕方をされていた。いわば、学問及び芸術の理解において名人芸の域に達していたといっても過言ではない。

私は偶々ドイツ文学を専攻し、直接先生に御指導を受けることになって、まず先生の豊かな教養と深く広い学識に驚いたが、やがて先生の人格そのものの偉大さに惹かれていった。先生は一面厳格なところがあり、先生についていろいろな中傷や批判があったと推量されるが、それは先生の真意を理解することのできない利己的な打算や狭量からくるものであり、先生の言動は常に無私の立場に立っていたことを銘記しておきたいと思うのである。見識の点で先生ほど立派な方はそういないと考えている。先生の精神は実に複雑な構造からできていて、常人の及び得ない一種の神秘な要素を持つており、従って先生の全体の輪郭を適確に把握することは不可能である。ただ私の感じでは、とにかく先生は鉄のように堅い信念と強烈な意志の力の持主であり、又クルクルとコマのようにまわる冴えた頭脳の働きを有し、それに人間を観る眼の

鋭さと適確さに秀れ、又、天性的に繊細な感受性を持っていたということができる。そして、ことに読書が好きで、抜群の語学力読解力を自由に駆使して、古今東西の書籍を文字通り読み漁っておられた。勿論、翻訳を好まれず、洋書はすべて英語かドイツ語の原書で読まれ、しかも驚くほど手堅く速い読みぶりであり、又、日本文学が好きで、古典のみならず現代文学にも親しまれ、現代精神思潮を理解するために、毎月十冊近い主要雑誌を読んでもおられた。さらに歴史にも通じ、六国史を通読するなど和漢洋の名著は大抵読んでおられたであろう。先生自身も語られていたが、読書量にかけては先生の右に出る者は少ないだろう。屈指の読書家といつてよい。

ここで簡単に先生の学業について触れておくことにしたい。私は先生の広範囲な学業を三つに大別して考えている。第一にドイツ文学であり、若い時代には、レッシング・シラー・クライストなどドイツ古典作家の訳業に専心し、いずれも岩波書店より出版された。また上記の人々の紹介を行ない、次いで一時表現主義を研究されたが、やがてドイツ・ロマン派の研究に移り、後、ゲーテ研究に赴いた。そして生涯ゲーテを研究されたのである。シュラー学派の文献学に対抗して、生の哲学を基盤にして起たドイツの新しい文芸学の成立後、にわかに活気を帯びてきたドイツにおけるゲーテ研究の潮流にのり遅れぬように、先生は次から次にドイツの文献を読み漁り、多角的にゲーテを理解しゲーテ研究における日本の最高峰と名づけてもよいほど広く深い研鑽を行われていた。先生のドイツ文学は極めて哲学的要素が濃い。哲学を基盤にし、哲学の素養を発揮されているところに特徴があるが、

この分野における業績は「ゲーテの自然研究におけるイデー」及び「ゲーテの芸術観」(大谷大学研究年報掲載)に現われている。

第二に日本の造形芸術及び芸能の研究である。先生自身ドイツ文学よりこちらを専門にしたがっていられたほど熱心に勉強された。日本近代における美術研究の草分けである福井利吉郎氏により美術の手ほどきを受けてから、実に飽くことなく日本の最高級の絵画、彫刻、書道を観、雪舟展など展美術のらん会には朝から午後遅くまで博物館に入りびたりで、翌日にはまた疑問をもつて再びでかけ、幾日も続けて通う熱心さであった。私はいろいろ先生から美術鑑賞の要領や美術のよさの判別法を教えられたが、私は芸術作品を先生ほど細かく味わい、真に美術品の気品まで見わたける感覚の鋭さを持った方を知らない。聞くところによれば、能・歌舞伎の場合も同様であったといわれている。私自身先生はドイツ文学よりも、日本の芸術一般に対する理解の方が上ではなかったかと思っている。この分野の業績は「世阿弥の言葉遣い」及び「雪舟における写実主義」(雑誌「心」掲載)などに現われている。

第三に明治以後の日本の精神史に欠くことのできない人達との親愛な交友から来る同時代の芸術家、学者、思想家の把握である、先生がもつとも親しくしていたのは、やはり倉田百三である。先生に宛てた倉田氏の書簡(角川新書「生きんとて」)をみれば先生に対する倉田氏の傾倒、先生の倉田氏に対する思い遣りを如実に理解することができる。それに安倍能成、小宮豊隆、阿部次郎、和辻哲郎ら雑誌「思潮」のメンバー(先生自身中心的存在であった)との交際により、当時の精神的状況がいかなるものであ

ったか、私は先生のなまの話によっていろいろと聞くことができた。先生は安倍能成が大好きであり、小宮豊隆とびったり呼吸が合っておられる御様子であった。武者小路実篤、志賀直哉らの「白樺」派と並んで、明治以後の精神史の二大金字塔といってもよい「思潮」「思想」の前身)のグループに先生が所属していたことは、たえず自分は精神史の一役を荷っているという意識を得て、生きた学問研究を試みることでできたのではなかろうか。この分野の著述に「倉田百三の悲劇」(雑誌「心」掲載)などがある。

以上三つに分けて先生の学業の関心を略述したが、この三分野とも実に深く、常人の行ない得ない情熱をもって常に思索し、考究の手を決してゆるめなかった。私は先生の情熱の強さに、人間を超えた神的なものを感じたのであるが、それは私のみではないと確信している。

晩年にいたっても先生の研究心は衰えを見せず、昭和三十五年夏の安居に、曾我量深学長の「教行信証信の巻」が講ぜられた時、それを契機に、再び真宗大系を繙き、二十年余り勉強された総決算のつもりで再び浄土真宗を学び、安居の折に毎日四、五時間の予習復習を欠かさず、曾我先生の読みの深さに感服されていた御様子であった。

また学生の卒業論文の審査のために読み出したトーマス・マンに興味を覚えて、以後四、五年トーマス・マン研究に没頭された。さらにこの二、三年前よりもっと早くやればよかったと言われたがらりルル研究を始め、今年はその演習がある予定であった。私も久しぶりに聴講したいと先生に申出で、先生とともに勉

強したいと思っていたのに、その希望も空しく断られた。

いよいよ入院が決まり、次いで手術も行なうことが決ってから、先生はむしろ平然とされていた。私は手術を止めるよう度々設得したが、先生は医者と医学を固く信じて少しも疑わないので、私はかえって先生の素朴な信頼の心に打たれて、二言三言葉を続けることができなかった。で、先生の御希望からごく内輪の人だけで、手術に必要な血液をおあずけすることになり、私は岸先生とともに預金銀行へ参り、二〇〇〇献血を行なった。長い間、先生から与えられた御恩に対して、私の報い得た唯一のお礼のしるしであった。青年時代の華やかに較じて、晩年の先生は淋しい御様子であったが、よい学生を育てたいという一念で、元氣よく登校されていた。恐らくこの二、三年間の先生はいろいろな面で御心労もあったが、授業だけは楽しくやられたと思う。先生の学問に対する無限の情熱、飽くことを知らぬ人生の真実への探究心は、俗物どもの関知し得ぬ世界であり、この精神力の偉大さは先生の死を越えてわれわれを永遠に鼓舞してやまぬのである。

紙面の都合もあり、残念ながらごく大雑把な、表面的なことしか書けない。先生のお人柄や学問は恐らく直接、指導を受けたり、親しくお話することのできた人でないと実感され得ないだろう。それは先生の人格そのものからおのずと迸り出るものであったからである。先生は学問のための学問、単なる本読みを嫌った。自分の内から真に問い、自分の個性を生かす生きた学問をのみ追求した。だから、人生の本質的なところから決してはずれることがなかった。私は先生から学問を教えられず、人生を学んだ。頭の学問ではなく、心の学問を学んだ。人生と芸術に対して

私なりに開眼された。私は先生を恐しい人間であると実感している。人生を観る先生の眼は底知れないものがあつた。私は常に先生の洞察力の深さを神的なものとして感じている。先生は順境にしろ逆境にしろどんな隙間からも人生の真実をみぬいた。そして実に生々しくそれを語つた。私はこれからの人生の歩みにおいて決して先生を忘れ得ないであらう。先生は不気味な魔力を持って惹きつけて離さないであらうと思つてゐる。私が先生を失なう時は、人生に対する追求を忘却してしまつた時である。人生に対して真実である限り、私は先生にいつまでも付き添つて行くものと考えてゐる。人間の魂というやつは不滅なのだ、生きつづけて働くではないか。これが先生の死から得た私の体験の中心である。私は不思議に人生の無常を感じなかつた、むしろ偉大な人間の魂が死を契機にこれほどまで不滅の重みを持つて作用してくるものなのかに驚いてゐる。還相廻向という不思議な仏智なのだらうか。

著作論文目録

『著者』

- レッシング賢者ナータン (附人類の教育) 岩波書店 (大正10)
 クライスト公子ホンブルク 岩波書店 (大正10)
 シラー美学論集 岩波書店 (大正14)
 ストリントベルク燕曲集 岩波書店 (大正15)
 ストリントベルク黒旗 岩波書店 (昭和2)

『論文』

- シルレルとゲーテの手紙 「思想」第5号 (大正11)
 シルレルとゲーテの手紙 「思想」第6号 (大正11)
 シルレルとゲーテの手紙 「思想」第11号 (大正11)
 シルレルとゲーテの手紙 「思想」第13号 (大正11)
 ケーベル先生のこと 「思想」第22号 (大正12)
 鵬外の歴史小説(1) 「大谷学報」第31巻第2号 (昭和27)
 鵬外の歴史小説(2) 「大谷学報」第33巻第4号 (昭和29)
 鵬外の歴史小説(3) 「大谷学報」第34巻第1号 (昭和29)
 倉田百三の悲劇(1) 「心」第5巻第7号 (昭和27)
 倉田百三の悲劇(2) 「心」第5巻第8号 (昭和27)
 ゲーテの自然研究におけるイデー 「大谷大学研究年報」第5集 (昭和27)
 鵬外の「青年」 「心」第6巻第2号 (昭和28)
 鵬外の「青年」 「心」第6巻第3号 (昭和28)
 ゲーテの芸術観 「大谷大学研究年報」第9集 (昭和31)
 家 「心」第9巻第12号 (昭和31)
 鈴木君の「一炉の香」を読む 「真人」 (昭和32)
 世阿弥の言葉遣い 「心」第14巻第3号 (昭和36)
 雪舟における写真主義 「心」第15巻第2号 (昭和37)
 ゲーテの歩んだ道(1) 「心」第17巻第9号 (昭和39)
 ゲーテの歩んだ道(2) 「心」第17巻第10号 (昭和39)